



随 筆

チャレンジ精神のサプリメント

今 西 正 道*

encouragement to challenge

Key Words : frontier spirit, fighting spirit, organization-culture, hero

● 新人の季節

陽春4月、その年の新人から挨拶されるのだが、その若さに少なからずまぶしさを感じつつ、何か少し今までとは感じが違うなどの思いを抱くのは歳のせいかも知れない。この頃の技術系は、修士が多いので一昔前の幼さは無くなっているのに、なんとなく良いところの坊ちゃん嬢ちゃんの持つ雰囲気似た頼りなさを嗅ぎ取るのは、ひょっとしたら先入観かも知れない。40年前の自分と比べると、動作も身につけているものも確かに皆がみんな洗練されていて、我々の時代には居た野人のような人間が混じってないし、表面的な判断だが、生意気なのがいらないような気がする。我々が入社した頃の弊社は未だ中企業から脱皮したての頃だったから、今入社してくる連中とは桁違いにデキは悪かったのだろうかあとその昔を思い出したりしている。

彼達の仕事振りに対する上司の評価は、「テキパキとこなして、それなりにデキル。理解も早く、頭は良い反面、言われたことしかやろうとしない。」に集約される。私が社長を勤めていた子会社での現場のオペレーションを担当した高校卒の新人のケースだが、配属早々に簡単な困難を乗り越えられず、出社しない人がいた。職場のリーダー、課長始めメンバーの応援を得て何とか継続させたが、そのひ弱さに驚いた経験がある。私達の頃なら、即刻解雇であっ

たろうと思うが、「辞めてもらいましょう」と言ってきた管理者に、その子の親御さんの気持ちも慮り、「そう言うな、時代は違うのだから出来るだけの事をしてあげよう」と言う指示を出しつつ、自分の甘さにある種の自己嫌悪を感じていたものだ。

そう言えば、先輩に連れて行かれて前後不覚になる程飲まされるのが当時の新入生歓迎の儀式だった。「いやもう飲めません」等と言おうものなら、「酒の会社に入ってるんだ。俺の杯が受けられないのか・・」なんて凄まれて、仕方なく飲んで、その場に寝てしまうような始末であったが、そう言う風景も20~30年前ぐらいに無くなってしまった。同じ頃、寮などで行われていた「ストーム」もこの頃ではトンと聞かなくなった。今の若い方には分らないだろうが、寮で熟睡している最夜中に、先輩数人がドヤドヤと入ってきて「起きろ!」と叩き起こされ、飲めとか、別の新人の部屋を襲うからついて来いなどと言われてしぶしぶ同行したものだ。いわゆる旧制高校の「ばんから」気風が60年代頃まで残っていたが、それ以降は新人が受け入れられないようになったそうである。後輩もさることながら先輩も優しくなっていたと言うことだろうか。

● 若者点描

会社の中だけでなく、世間に目をやると、若者について気になる情報も多い。どこにも働きに行かず、と言って学生でもなく、職業訓練も受けてない人を「ニート」と言うのだそうだが、いま51万人いるという。また、定職を持たずアルバイト等を気の向いた時にやって、日々を送っているのを「フリーター」と言うが、週刊誌などでは500万人を超えるそうだ。マスコミの報じるところによれば、名刺にフリーターと書いている連中がいるとかで、会社でもなく職業でもないのにどういう積りかとコメントしていた。

犯罪の低年齢化、凶悪化は、私達の世代には信じ



* Masamichi IMANISHI
1941年2月生
昭和39年(1964年)大阪大学工学部電子工学科卒業
現在、サントリー株式会社、顧問
(取締役生産企画部長、同ビール生産担当、サントリー食品工業社長)、
経営(生産・技術)
TEL 06-6346-1151
FAX 06-6345-1127
E-Mail masamichi_imanishi@suntory.co.jp

られない程であるが、事実なのだから目を蔽ってはいはならないと思いつつ、その根本が理解できないで茫然としているに等しい。これもマスコミ報道の受け売りだが、万引きなどは犯罪とも思っていないようで、茶飯事であるそうだ。数年前に首都圏の古本屋さんが万引き少年を追いかけて店の直ぐの踏切で事故死し、古本屋を廃業したという報道があったが、それとて、その本が欲しくて万引きしたのではないと聞く。古本を確実に購入してくれるチェーン店の興隆に伴い、どの本屋でも高く売れる本の万引きが増えているそうである。

また、真面目な子供達の話でも心配事がある。先日世界の中に於ける日本の小学生や中学生の学力のレベルが落ちていることが新聞を賑わしていた。学力が本当に落ちているのかどうかを示す統計データは厳密に言えないそうであるが、いくつかの時系列データを見る限り着実に学力は低下していることは否定しがたいように思う。新聞等では、学力低下の犯人はゆとり教育であるとされていたが、本当なのだろうか。

私達は小学生の頃から、日本は加工貿易の国だから、資源のない国だから、人だけが財産だと教えられてきた。だから、勉強するのだと信じて努力してきたし、努力してきた結果その通りの豊かな国になることができた。しかし、第一線を退き世の中を見渡してみると、何処かで間違っていたのではないかと考え込む状態である。

● ローマは一日にして成らず

ここ数年で読んだ本で一番感激したのは、塩野七生著「ローマ人の物語」である。ローマ帝国の興隆から滅亡までを物語として書かれている。80年代に会社の衰退防止策を考える参考としてギボンの「ローマ帝国衰亡史」や森本哲郎著「ある通商国家の興亡—カルタゴの遺言」を読んだりしたが、ローマ興隆の理由は発見できなかった。しかし、「ローマ人の物語」のポエニ戦役でのローマの対応で、これがローマを帝国にした要因ではないかと思いついたのである。少し話が長くなるが、その説明をしたい。

ご存知のようにローマは、ハンニバルに徹底的な敗戦を喫する。象を伴いアルプスを超えるという常識を破った方向からのハンニバルの攻撃に、ティチーノ、トレヴィピア、トラジメーノ、と3連敗のローマ

は、BC216春イタリア南部のカンネで4回目の戦闘をおこなう。ローマ軍8万7千、ハンニバル軍5万、約2倍の兵力で戦うもハンニバルの天才的な指揮により、ローマは壊滅的な敗北となる。その戦死者は7万人と伝えられている。ちなみにハンニバル側の戦死者は5千5百人だったそうだ。その時のローマ市民の様子を塩野七生氏は次のように語る。「ローマは、完敗の知らせを静かに受けとめていた。敗残兵をまとめ、彼らとともに首都に帰り着いた執政官ヴァッロを、元老院議員をはじめとする全市民が、城門まで出迎えて労をねぎらった。(中略)ヴァッロへの非難はいっさい聴かれず、(中略)広場に集まって為政者たちに抗議するという、他の民族ではえてして起こる現象も、そのときのローマではまったく見られなかった。」

私が驚いたのは次の史実である。ハンニバルはカンネの会戦でのローマ軍の捕虜1万人の内、同盟諸国の捕虜2千人は無償で釈放し、ローマ市民8千人の捕虜について身代金を払えば引き渡す旨を捕虜代表10人によって伝達させる。相次ぐ敗戦に予備役を召集し、奴隷から志願兵まで募る状態のローマ元老院の結論は、何と拒否であった。金がなかった訳ではない、ハンニバルからの講和の打診を拒否したのである。ハンニバルはローマ市民の捕虜をギリシャに奴隷として売り飛ばした。戦役続行の意思を明らかにしたローマでは、元老院議員全員が不動産以外の全ての財産を供出し、無産階級を除く全市民が応分の戦時国債を負担し戦費を調達した。ポエニ戦役を継続したローマはスキピオの登場によりハンニバルを少しずつ押し、14年後ザマの戦いで完勝する。その後ギリシャをマケドニアから解放し、奴隷として売られたローマ市民の買い取りを八方手を尽くして行いが、20年前の8千人は1千2百人になっていたそうである。

捕虜には元老院の親戚もいたし、もと元老院議員もいたというが、断固たる意思で拒否をしたのである。私はこの不屈の、他に依存しない「闘志」に千年もの長きに亘る帝国を築き上げた根源を見た思いがする。そして、このような精神は歴史をひもとくと色んなところに発見できるのである。我が国が欧米の侵略から免れた明治維新の期でも類似の精神を見つけれられる。また、私達の関係する技術だとか工学の分野でも、こう言う精神が発揮され革新的な発明

等がなされる場合が多い。例えば、ゼロックスの乾式複写機の開発を行ったカールソン氏らも、何度も技術的あるいは資金的に挫折の直前まで追い詰められながらそれを克服して、成功にたどり着いたと読んだ。

●「やってみなはれ」も英雄印のサプリメント

今の社会の状況を見る時、敗戦のショックで、嫌悪して捨ててきたものの中に本当に大事なものがあったのではないかと思う。学力の低下について、多くの論は「ゆとり教育」にその責を求めるが、「ゆとり教育」は単に現象であり真の原因ではないのではなかろうか。そのような教育をやろうと思いつく発想の根源を変えていかねば、この国の未来も期待出来ないものとなる。

私は、それは「闘争心の欠如」だと思っている。決して戦を好むと言う意味でなく、チャレンジする時、自分を克服する時の精神を含めて困難に立ち向かう決意を「闘争心」と言っている。日本は敗戦のトラウマから「争いを嫌悪してきた」と思う。それが子供同志の喧嘩の回避、あるいは競争の否定的な認識となり、運動会でも生徒達が並んでゴールインするような実につまらない発想を生む結果となっている。15の春は泣かせないと学校の順位付けを無くすべく学校群制度を実施した知事が一世を風靡したこともあった。同類の流れに内申書の重視や、センター試験がつながっていて、競争の過酷さの解消を目的とすると言いながら、別の面でシビヤな副作用を及ぼしているが、同じように、詰め込み教育は役立たず、子供達が可哀想だと言う思想が「ゆとり教育」なるものを生んだのであろう。しかし、百マス計算等の一種単調に見える訓練が子供の成長を促進すると言う報告があるように、基礎教育の時代は押付け的に見えるやり方も絶対に必要である。

青色ダイオードの開発で有名な中村修二氏の開発物語など読んでも、モノとの技術的格闘以前に上司や周りとの闘争が語られている。自分の負けず嫌いは兄弟喧嘩がベースだとも書いている。私が持つ小さな経験だが、世に初の発泡酒「ホップス」を上市するまで、技術的な問題ではなく、上からは「ビールでも売れないのに発泡酒が売れるはずがない」とか、部下の技術者達から「まがいものをつくるのか」の抵抗を突破することにすごくエネルギーを使っ

た。ビールで最弱の会社ですら新しいものの発売は容易ではなかった。こう言う上司や先輩、同僚等の内なる壁、あるいは抵抗勢力と不退転の格闘なしに新しいことは創出できないと信じているし、そういうことを学生に技術でない重要なものとして教えなくてはならないのではなかろうか。この「闘争心」は知識として教えるマターではないし、学校教育だけが責を負うものでもないだろうが、この精神なくしては教育も成立たぬ、最も根源的なものである。今の日本の状況はこの根本がないから、景気が悪いのも全て政府の責任と自らの責を回避して、空白の10年と言われるような漂流をしてきた。

こう言う「断固として困難に立ち向かう」精神は、古来からの日本人の精神文化を形成してきたものだが、その伝承が途切れかけているのだろう。経営学では「企業文化」(組織文化)の概念があり、3つの要素から成立つとされている。1つは企業の性格を決定する「理念」で2つめは「その理念を体現している「英雄」であり、3つめは「儀礼」で、祝典やお祭りさわぎで、英雄を選び出したり、理念を実践したグループを祝ったりするのである。この3つの要素を組合せて各会社も自社の文化を構成メンバーに浸透させていっている。教育にも同様なことで、「闘争心」を次世代へ伝える仕組みが必要である。

幼き頃に学んだ「野口英世」伝は、戦後の極貧の中で困難に立ち向かう勇気を、気力を与えてくれた。まぎれもなく、私にとって「野口英世」は「英雄」であった。同様にどの学校でもそう言う「英雄」があるべきではなかろうか。そう言えば大阪大の優等賞である楠本賞の楠本長三郎総長も名は知っているが、残念ながら「英雄」としての奮い立つような話は聞く機会もなかった。優等賞に名前を残す方なら必ずや「英雄伝説」があるはずだ。その学校にとって一種「神話」があるはずだし、それが語り継がれる場がなくてはならない。例えば民間の同窓先輩でも私の知りうる限り、ソニー創業者の盛田昭夫氏の「フロンティア開拓精神」も大阪大の中で語り継がねばならない一人ではないだろう。

先日新築なった大阪大学中島センターに道すがら立ち寄らせてもらった。最上階の佐治敬三メモリアルホールに立って、生前指導してもらった頃がよみがえり万感の想いを抱きつつ、今の時代にこそ「やってみなはれ」精神の語り継ぎが本当に必要だと思っ

た。メモリアルホールにきた後輩には佐治敬三の名
前だけでなく、「やってみなはれ」のチャレンジ精
神と闘魂を知り、自分の人生に生かして行って欲し
いと思わずにはいられなかった。

